

2 1時間の授業の中での評価との取り組み

1時間ごとの授業を大切に扱う教師の態度は大切だが、毎時間具体的な評価と取り組む授業はなかなかできるものではない。実際に記録をとって子どもを追究するのは、各担任が1～2のことに内容をしばって、子どもの変容をとらえようと努めている。

次に挙げる例は、小学部高学年で「量（かさ）を意識する子の育成」をめざす実践である。学習は、生活の中で、掃除バケツの水の分量、コップの飲み水の量を適量に処理できるようにすることをねらって、具体物の操作をくり返し、それをことばと結びつけて表現させようとした。

下表は、1時間毎の子どもの指導目標を的確におさえるため実施した評価表である。どの教師も同じ方法で授業と取り組んでいる。

児童名	前時の実態	個人目標	評価	次時目標
○子	かさは容器で高さのかわることに気づきだした。	容器が変わっても、かさは変わらないことに気づく。	→	
○夫	かさを高さでくらべようとする。	具体操作をくり返す中で容器をかえてもかさの変わらないことに気づく。	→	

前時の実態から個人目標を設定して、指導を焦点化するわけであるが、前項で述べたように、知識・技能にかかわるものが多い。また、毎時間変化が見られるとは限らないので、何日も同じことが続く場合もある。しかし、このように個人目標を的確におさえて指導にあたることは、教師の授業との取り組み、手だてを反省する機会も多くなり、指導法の改善にもつながってくる。

この授業では、水による比較 → 色水による比較 → ジュース・カルピスによる比較と、単純な操作活動を水の変化で興味・関心を支え、「多い」「少ない」・「いっぱい」「すこし」をことばとかかわって表現するよう14時間にわたって反復学習している。現在、7名中4名がかさとことばの対応が可能である。

子どもの態度化にかかわる評価は、単元を通して子どもの変容とかかわる場合が多い。知識・技能にかかわる場合もそうだが、単元はひとつのくぎりと考えるべきであろう。

3 単元を通しての評価との取り組み

表現する力が生活の中で、「生きて働く力」として育つには、学習したことが、ことばや動作や作品となって現われてこなければならぬ。これが態度化してきたということで、長い目で子どもを見守ってこそはじめてわかることである。次に挙げる例は、中学部1年の3名の生徒が、